第2回小樽市立学校の規模・配置の在り方検討委員会　会議概略

日　　時 ： 平成18年8月23日（水） 9:30 ～ 11:35
場　　所 ： 小樽市教育委員会庁舎　3階第2会議室
欠席委員 ： 高橋委員
事 務 局 ： 教育部次長（学校教育担当）、指導室長、
教育部主幹（適正配置担当）、総務管理課長、
学校教育課長、学校教育課主査

（注）・発言にかかる委員の個人名は表記しておりません。

---

事務局　おはようございます。本日の会議でございますが、高橋委員が都合により欠席となってございます。また、野村委員につきましては、若干、遅れるということでございます。それでは委員長よろしくお願いします。

委員長　皆さんおはようございます。第2回目の検討委員会を始めますのでよろしくお願いします。

まず、本日の会議録の署名でございますが、前回に引き続きまして、名簿順でお願いしたいと思います。大上委員と大沼委員にお願いします。よろしくお願いします。

それでは、さっそく、議題に入らせていただきます。

本日、お知らせしておりますのは、「小中学校を取り巻く課題や検討事項についての意見交換」、それから、「学校規模の在り方についての意見交換」ということになっておりますが、まず最初に、前回、色々とお願いしておりました資料がございますので、それについて事務局のほうから説明をお願いします。

事務局　説明に入ります前に、前回、委員から、市内の小中学校の配置について、山坂をイメージできるような地図ということで、お話しがございましたが、これにつきましては、ちょっと難しい面もございまして、現在、検討中でございますので、よろしくお願いしたいと思います。

それと、発言につきましては、たびたびで申し訳ございませんが、マイクを持ってご発言の方をよろしくお願いしたいと思います。

それでは、本日の配布資料につきまして、担当の方からご説明いたします。

事務局　おはようございます。適正配置担当の山村でございます。

私の方からは、資料３５、ﾍﾟｰｼﾞで39ﾍﾟｰｼﾞから43ﾍﾟｰｼﾞまでの部分、「小規模校に関する他都市の検討内容等」にかかる資料の説明をいたします。

学校の規模を考える場合、その規模がどういう作用、影響があるのかということで、多くの自治体で議論がされております。

そのうちのいくつかの自治体での検討内容について、表現を変えずに、表にしてみたものです。

いくつかございますので全てということにはなりませんが、ひとつ見てみますと、身近な例として、帯広を紹介いたします。

帯広市は、本市で今進めているのと同様に、平成１７年に市民の検討委員会での議論が続けられ、昨年１２月に検討委員会の報告書がまとめられました。その前段で、帯広市教委のプロジェクトチームがプロジェクト報告書としてまとめ、検討委員会に報告したものから抜粋したものであります。

比較の項目として、「学習指導の視点」「児童生徒の生活面の視点」「学校運営の視点」という3つの視点から検討しております。

「学習指導の視点」では、メリットとして、「児童一人ひとりの個性や特性に応じ

た、ていねいな指導ができやすい」「施設設備や教材教具の制約を受けにくいので、学習効果が上がりやすい」「授業や運動会、文化祭などの学校行事で、一人ひとりの児童が活躍する場を多く設定できる」というようなことがあげられています。

一方、デメリットとして、「考えの積み上げによる集団思考が活発になりづらく、深まりを欠く傾向が生じやすい」「同一グループでの学習となるため評価が固定化されやすく、学習意欲や競争心に問題が生じやすい」「総合的学習時間等における課題別活動や選択教科、部活動などの面で選択の幅が小さく、制約を受けやすい」「運動会等の学校行事で一人ひとりの活動の場が多い反面、内容に限りがあり、個人の負担が大きい」とあります。

また、「児童生徒の生活面の視点」からのメリットでは、「児童生徒、教師、保護者を含めて、お互いをよく知り、より深い結びつきができる」「学級の人間関係が深まり、話し合いや計画、実践が円滑に進行しやすい」「全教職員が全校の児童一人ひとりの特性、家庭環境等を把握しやすく、指導を行いやすい」ということがあげられており、デメリットとしては「人間関係が固定化・序列化しやすく少数の言動が集団を左右しやすい。また、いじめの影響が後年時まで残りやすい」「学級のルールや価値観が固定化されがちになり、多様なものの見方・考え方を学んだり、新しいルールや学級文化、人間関係を作り上げようとする機会が少なくなる」「教師に依存する傾向が強くなりやすく、主体性、自立性や社会性などが育ちにくい面がある」とあります。

「学校運営の視点」ということでは、メリットとしては「教職員ひとりの兼務が多くなるので視野が広がったり、いろいろな経験を積みやすい」「教職員の人数が少ないため、校務について共通理解や協力が得られやすく、実践が徹底しやすい」という点があげられており、デメリットでは「教職員の配置が少ないため、校務分掌で個々の教職員の負担や時間的制約が大きくなる」「教職員の数が少ないため、緊急対応時などに他の教員による支援体制をとることが難しくなる」「学年や教科で複数の教員がいない場合、教員間での研修・研究が少なくなる」「教員の数が少ないため、運動会等の学校行事の円滑な運営及び多様な教育活動にとって障害となる場合がある」というようなまとめをしております。

他の都市においても、この資料にあるようなまとめをしてございますけど、ここで殆どの都市において共通しているのは、比較をする際に、比較の項目を3つ程度に分類して、その中で比較するという、具体的なやり方をしている点です。

そういう意味で、他都市の議論をひとつの参考として、小樽としての実態を整理しながら、議論していただくのがよいのではないかと考えております。

事務局　学校教育課長の川田と申します、よろしくお願いします。

それでは、引き続きまして私の方から、資料36「平成17年度指定校変更・区域外就学状況」ついてご説明申し上げます。

指定校変更と申しますのは、表の下の方に※印で記載してございますけども、「同一市町村内に、その市町村が設置する小学校・中学校が2校以上ある場合に、保護者の申し立てにより、就学すべき学校として教育委員会が指定した学校を変更できる制度」ということでございます。

これは、学校教育法施行令8条の規定で、市町村の教育委員会が行った学校指定について、相当と認めるときは、保護者の申し立てにより変更を認めることができるという規定がございます。これは、主に、地理的な理由だとか、身体的な理由など、児童生徒の具体的な事情に則して、変更を認めることができるという規定になってございます。

この指定校の変更につきましては、平成9年1月に、文科省の「通学区域制度の弾力的な運用について」ということの通知や、平成10年9月に、中教審の方での「今後の地方教育行政の在り方について」という中で、全体的に、通学区域の

弾力的な運用、それから学校選択の機会拡大の傾向に、現在あるということでございます。

この表は、平成17年4月1日から平成18年3月31日までに、指定校の変更をされた児童生徒の数について、記載をしてございます。1校々々読み上げることはいたしませんけども、小学校では190名、中学校では158名という形でそれぞれ変更をしてございます。中学校のうちで、※印が付いてございますけども、158名のうち44名は私立中学校にそれぞれ就学をしているという状況でございます。

指定校変更の理由の多くは、先程も申し上げましたけども、地理的な理由だとか、最終学年あるいは学期の途中で学校を移る、それから、両親が勤務のため親類宅のほうに移るとか両親の勤務先の方に移る、といった理由が多くございます。

ご説明は以上のとおりでございます。

委員長　どうもありがとうございました。

本日の資料でもよろしいですし、前回説明されました資料についてでも結構でございますから、何かご質問等ございますでしょうか。

委員　前回、（資料の要求をされた）委員からは、どこの学校から、どこの学校へ越境しているのかが分かる資料があればという話しだったんですけども、今の説明は、たぶん、どこの学校に行くはずだったけど、～たとえば、双葉（私立）中学校へ行きましたよという説明の部分は分かったのですが～、どこに行ったかという説明がなかったと思うんですけども。それはやはり難しいのでしょうか。

事務局　今、委員からお話しがありましたように、これは、例を出しますと、忍路中央小学校で5人の方が指定校を変更して、別の小学校に行ったということでございます。

ただ、どこの学校に行ったかということになりますと、問題は、いま現在、私どもの方で、例えばDV・ドメスティックバイオレンスだとかサラ金だとか、そういった形で指定校を変更しているお子さんというのが結構いらっしゃいます。そういった関係で、指定校を出すと、例えば、どこの学校からどこの学校へ行ったということが、そういった関係者に類推されると申しましょうか、そういったこともございまして、私どもの方では、公表することは控えたいと思っておりますので、そういう事情でご了解いただきたいと思います。

委員長　あと何かありますか。

委員　前回お願いをしたときに、指定校を変更している人数の傾向が分かればということで、何年か分か、2年でも3年でも遡ればというふうにお願いしたのですけども、平成17年度1年間分ということは、それも難しいのでしょうか。

事務局　とりあえず17年度分を用意させていただきましたけども、傾向ということであれば、16年度とか15年度とか、そういうことでしょうか。

委員　そうです。

事務局　17年度の資料が直近でございまして、16、15となると書類的なこともあって、今回は17年度をご用意させていただきましたけども、そういうことであれば、もう一度書類を精査しながら、同じような傾向の書類を用意したいと思います。

委員　私の認識不足かもしれないので、ちょっと的はずれな質問になるかもしれませんがご了承ください。

指定校変更というと、どうもイメージ的に良くないという印象を受けるんです。

私としては、指定校の変更で誰がどこを出てどこが変わったかということを、問題にされていることが、今一歩良く把握できないのですが、どうでしょうか。

委員　私の説明不足だったのかもしれませんが、前回の時に指定校変更の状況を知りたいと思った理由を、順番が逆になってしまったんですが、お話ししたいと思います。

それは、ある一定の区域から、継続的にある地域ある学校に、指定校の変更をしているような傾向があるんじゃないかと思ったんです。

前回配られた資料の中に、これから入学してくる、19年から24年までの児童の数を数えましたということで、一覧表にしてもらったんですが、ここに、実際の数字を当てはめなければ、机の上の数字のことであって、実際問題ある地域からは、こっちの学校の区域になってるんだけど、実際はこっちの学校の方が近い、そういう理由で指定校を変更しているという所があったとすれば、この数字にそこを当てはめないと、実態にそぐわなくなるんじゃないかと思ったんです。この数字自体が、見込み違いと言いますか、どこで人数がこうだからと考えていくうえで、実態がどのようになっているのかというのを知りたかったので、この書類を出してもらえたらというのが理由でした。

だから、指定校変更が悪いと思ってるとかそういうことではなくて、実態がもし分かればと思ったということです。ただ、全てを出すのは難しいという話しがありましたので、そこまでこの委員会の中で突き詰めていくのは難しいのかと感じているところです。

委員長　つまり、恒常的に、ある小学校から特定の小学校に指定校変更がある、ということがありますと、これは配置の適正を考える場合に大変参考になるのではないかと、そういうことなんですよ。この点どうなんでしょうか。

事務局　先程申し上げましたけども、多くは地理的な理由といいますか、学校の校区というのはある程度の住所で分けてまして、そのライン上にある子供さんについては、例えば、通学の道路の形状が行き易いだとか、そういうことで移る傾向が多いということでございます。それは、どこで線を引いても、多分そういうことは起きるんだろうなと思っておりまして、ある程度そういった部分につきましては、私どもの方で地図を見ながら、それから、保護者の申し立てを聞きながら変更をしている訳です。

実際的に見た場合に、例えば、どこの地区が多くて、どこの地区が少ないということは、今の私の記憶の中では、数字を見てませんのではっきりとは申し上げられませんけども、取り立てて大きな変動はなかったように記憶してございます。それは、私どもの方でもう一度、その辺の部分を書類的に数字をおとしまして、ご呈示したいと思ってございます。

委員長　相当の理由と認める時ということで、身体的な理由や親の転勤というのは仕様が無いと思いますが、例えば、地理的な理由で一体どの程度指定校の変更があるものか、この人数は把握できますか。それが分かれば良いんですが。身体的な理由とかそういうことは直接関係ありませんから。いまでなくて良いですけど。

例えば、比較的多い、入船になりますか、あるいは桜小学校ですか小学校で言いいますと、この中で、地理的な理由で一体どの位指定校の変更があるものか、それが恒常的にあるということになりますと、これは適正配置を考える場合に参考になるのではないかと、こういうことだろうと思うんです。

事務局　先程も申し上げましたけども、17年度ですけど、やはり地理的な理由ですとか、身体的な理由というのはそれ程多くはありませんけど、あと最終学年で移るだとか、それから隣接校区というのがございまして、これは校区が隣り合わせということでございますし、中学校の場合では部活動等の関係で校区を移るという事情もございます。その辺のところを、もう一度私どもの方できちんと精査させていただきたいと思っております。

委員　今、指定校変更の問題が続いているので、この読みとりですけども、確かに委員長が言われたように、桜小が19、入船が17と数字は接近してるのだけども、桜小学校のように大きな規模の学校、つまり全校児童数の大きなところでの19名と、比較的小さな学校の入船小学校の17名といった比較は、単純に数字の上だけでの比較はできないのではないかという気がするので。そこら辺をどう読みとるのかということは非常に難しいかと思います。

委員長　（事務局は）次回までに、ある程度資料をそろえて示してください。

あと何かありますか。よろしいですか。資料につきましては、またあとでお気づきの点がありましたら、いつでもご指摘いただければと思います。

委員　資料の件で、ほかの部分でよろしいでしょうか。

資料35番の小規模校に関するところですが、確かにどの地域も3つの視点、子供達にとって、授業の在り方、それから学校の行事等の組み立て、そして教職員にとってと、大体そういう区分けがされているようですけど、特に教職員にとってという読みとりになると、どこの地域も一般論として、比較的小さな学校よりは大きな学校の方が良いようなまとめになっているんです。ただ、私は、小樽の教職員の組合の代表で来ておりますけども、小樽の先生方に聞いたところによりますと、全てがそういうふうに集れんされている訳ではないと。

今回も、今日、あらたな適正配置の、規模・配置の在り方検討委員会があるということで、今日の会議に向けて、昨日・一昨日と職場の方から意見を求めました。そうしたら、時間がなかった中ですけども、多くの意見をいただきました。その中で、若干、必ずしも大きな規模を求めている訳ではないということを紹介したいと思いますけど。特に、やはり子供がいる間は、複式でも認めるという方向も必要ではないか。それは、子供にとっての学校というのは、遊び場であり、仲間とつどう場である。やはりそういう視点から、小学校段階では必要ではないかという意見もありました。同様に、複式学校のメリットというか、複式学校を存続させる理由もあるのではないかという意見もありました。それから、小樽の学校は一般的に、1学年1学級の小学校が増えてきているのは事実ですけども、その学校のある意味やりやすさというのがあるという指摘は、現場のほうから出てきてるので、一般的な他都市の検討状況と、小樽の先生方の考え方は若干違うということも紹介したいと考えます。

委員長　この、メリット・デメリットにつきましては、実は次の議題の中であらためて取り上げたいと今日は考えておりますので、その時に、今のご意見を前提にしながら、皆さんのいろいろなお考えをお聞きしたいと思います。

本日の資料等はよろしいでしょうか。

それでは、本日の議題の(2)(3)に入りたいと思います。

実は、ここで意見交換となっておりますが、いきなり意見交換と言いましても、やはり、色々検討するにあたりましては、最初は、勉強会のようにならざるを得ないんではないかと、私は思っておりまして。やはり、どのように考えたらよろしいものか、今出ましたメリット・デメリット、それから、いったい小樽の現状はどうなっているのか、ここらあたりも皆さんとともに正確に認識を深め、共通理解をまず持っていくことが必要ではないかと考えているところでございます。

「小中学校を取り巻く課題や検討事項について意見交換」となっておりますが、いきなりこういったような抽象的なことでご意見を伺うということも大変難しいと思いますので、私としては、さしあたり、今日用意していただいた資料でございますが、小規模校のメリット・デメリットと整理されたものがある訳でございます。いったい、ここらあたりをどう考えたらよろしいのか、この資料を参考にしながら、皆さんから率直な、あるいはご自由なご意見を賜りたいと考えている訳です。

おそらく、答申に盛り込む際にも、このようなことには触れざるを得ないのではないかと、こういうことでございますので、直感でもよろしいですし、普段考えていることでもよろしいですし、今ほど委員の方からご指摘のございました、もっと別の考え方もあるのではないかと、こういうようなことでもよろしいですし、あるいは経験にもとづいたいろんなご意見・評価・お考えで結構でございますので、ご自由にこのあたりをどう考えるのかということで、フリートーキングで良いんじゃないかと思いますけど、いろいろとご意見を伺いたいということでございます。

今、委員のほうからは、例えば複式学級ということも考えてもよろしいのではない

かと。どちらかというと、メリットよりはデメリットの方にウェートが置かれているのではないかと、このようなご指摘でございましたが。例えば、この資料を見ましても、東京中野区ですか、42ページですが、メリットはどこもなくてデメリットがたくさんあると、こういうような印象を受ける資料でございますし。小学校・中学校の小規模校には、それなりのメリットはあると私は思います。反面、メリットだけではなくて、やはりデメリットも考えられる。そこら辺りのバランスをどうするか、これが、配置の適正を考える、あるいは規模の適正を考える際に大きな意味を持つ訳でして、まず、ここら辺りのご意見を出していただいて、整理したいと考えているところでございます。

委員　同じ人間ばかり喋って申し訳ないんですが、私が、前回、小樽の地形にこだわったのは、最終的に学校をどうするかと考えていった場合に、先程の校区を変更してる話しじゃないですけど、地理的な状況というのは、保護者も子供も一番考えてくることになるだろうかと。ということで、最終局面で、やはりそこら辺のことを十分考慮した配置の在り方というのは、考えていかなければならないと思ってます。

ただ、今の進め方なんですけど、小規模校のメリット・デメリットということで、規模ということで今ポイントを絞って論議が進められようとしてるんですけども、確かに、規模ということになると、前回配られた資料8ページに、「小樽市小・中学校適正配置計画実施方針」があって、一応2番目に書いてますように、「小学校においては2学級、中学校においては3学級を標準」だと。その考え方は、基本的に変わってないと思いますし、これまでの議会の中でも何度も論議されてきた部分だと思うんですけども、規模を先に決めてしまうと、～小学校は2学級がいいよ、中学校は3学級がいいよと～、必然的に線引きが決まってしまうというか。規模を先にこう決めると、配置の在り方も、ここからここまでは、どこどこの学校になりますというような進み方になってしまって。

あくまでもここの委員会は、規模・配置の在り方検討委員会なので、そこの論議は、どちらかを先に先行させる訳でなくて、必ず並行する中で論議を進めていかないと、結論が先に走ってしまうのではないかという気がいたします。そういうことで、進め方の部分で、とっかかりの部分で、あくまでも小規模校のメリット・デメリットということでやっているんですけども、そこの進め方は、今言ったように並行の形でお願いしたいということなんです。

事務局　今、委員から、前回配付資料8ページの資料8「小樽市小・中学校適正配置計画実施方針」にふれてお話しがございました。

前回の事務局の説明の中で、私ちょっとふれたんですが、小学校の適正配置計画案の論議の中で、最終的に計画案の取り下げを教育委員会で決定した訳ですが、その取り下げをした時の大きな2つの要因がございました。

ひとつは、適正配置計画案、教育委員会で策定した部分については、なかなか理解が広がらない、というのがひとつ。

それから、もうひとつにつきましては、このまさしく今話題になりました、平成11年に策定いたしました適正配置計画実施方針。いま、指摘のございます、「小学校においては2学級、中学校においては3学級を標準とする」という実施方針自体が、やはりもう一度全体的な議論をしていかなければならないのではないかと。

そういうことで、この実施方針に基づく計画案そのものも、やはり取り下げをする、というようなことだったものですから、今現在、この実施方針自体は、教育委員会で廃棄はしてございませんけれども、ここに書いております1から6までの主要な部分、学校規模の問題、それから通学距離の問題、それについては、教育委員会としては正式には廃棄はしてございませんけれども、それも含めて、やはり市民的な議論をお願いしたいということで、この検討委員会でもぜひ、活発な、あらたな考え方を盛り込んだ形で整理をしていただければということで考えてございま

す。今、委員がおっしゃった部分では、小学校は2学級ありき、中学校は3学級ありきで議論をしたいただきたいという考えは毛頭思ってございませんので、その辺のところだけよろしくお願いいたします。

委員長　委員のお考えも分かりますが、取っかかりといいますか、最初ですから、一番馴染みやすいと言いますか、考えやすいと言いますか、取っつきやすい問題を、まず自由にご議論いただきたいという趣旨でございまして、なにもこちらの方を先行して先入観を持つなんてことは毛頭考えてません。

ですから、適宜、配置の問題も含めて、ご意見を出していただいて一向に結構でございます。

委員　規模・配置に入る前に関しての、お願いという形で聞いていただきたいんですが、まず、何を目指すかというところが柱になってくると思うんです。

小樽の公教育の目指すものというか、理念というか、そういうのもが魅力あるものでなければいけないとまず思います。

というのは、私の周りでもそうなんですけども、小樽に生まれてこの方ずっと住んでるという方は別として、他都市に少しでも住んだことがあるという方が今現在小樽にいて、さあ家を建てましょうということになると、まず小樽市内に家を建てる方はいらっしゃいませんね。ほとんどの方が、札幌手稲とか屯田とか、そっちの方に行っちゃうんです。私の周りだけですから、全部が全部とは言えないですけど。やはり、小樽よりも札幌が選ばれるというのは、それは規模の面でも仕方がないと思います。

親としてまず何を考えるかというと、子供の教育ですね。子供の教育環境を整えてあげたい。これをまず一番に考えると思います。手当がもらえるとか、どこにいたら得をするとか、そういうことはまず二の次であると思います。ですから、小樽の今回の規模や配置を決める前に、まず、どういうふうに小樽の教育を目指していくのか。それが魅力あるものであれば、小樽で子供を育てても良いんじゃないかと親に思ってもらう、そうすると小樽市の人口の流出が止まるかどうかは分かりませんけど、そういう形で小樽頑張れるねということであれば、また小樽のイメージはすごく変わってくると思うんです。

それで、まず、ひとつだけ私が言いたいのは、カリキュラムの穴があると思います。小学校の時点では、たぶん親の認識不足だと思いますけど、ほとんどの親が、うちの子はまあまあだと思って小学校卒業して中学に行きます。それで、1学期の最初の試験で、まず奈落の底に落ちるそうです。うちの子はこんなにダメだったのか、これは何でなんだろうかと。小学校は今、横並びですね。突出した子を求めない。大体何でも横並び。運動会の競争でも、早い子は早い子同士で走らせる。こういうことが当たり前になってきてるんですね。自分の大体のレベルというか順位が全く分からないまま中学に行ってしまう。それと、例えば英語をとりますと、英語は中学1年生の時点で、まずアルファベットの大文字・小文字が必ず書けることというのが、中学1年に入った時点での最低条件のはずなんですが、ローマ字教育は小学校4年のみです。ですから、その辺でどうしても溝ができてしまうので、私がお願いしたいのは、小学校・中学校一貫校ということにちょっとこだわりましたが、そうではなくて、連携ですね。近隣小中学校で連携して、中学でこういう部分がつまずくのであれば、小学校の算数であれば分数であるとか、中学に行って最低限必要な部分は、小学校の時点で強化するとか、そういうことをなるべく連携して、子供のつまずきをなくすという方向で考えていけたらと思います。

委員　今の教育という面で、私も確かに他都市から来たので、すごく良く感じるんですね。これに出てるようにデメリットがたくさん書いてありますね。特に、うちの子が通ってる学校では、すごく転入とかの出入りが少なくて、ずっと同じ子たちで、固定化した人たちで生活していくので、市内の中でも自分のことを良く分かってないみ

たいで、中学に行っても実際なんか良く分かってない子がいて、はじめて高校受験になって、うちの学校はそうなのという感じになってる人達がすごく多いんです。だから、やはり教育面では、もうちょっとしっかりしてほしいというのがあるので。

確かに小規模校も良いとは思うんです。それはそれで、特認校みたいな形で市内どこからでも通えるような学校を求めるとか、そういうふうにしてる市もあると思うんです。そういうような形を作るとかして、確かに先程の委員も言われたように、競争しないようにとは言ってるんですけど、実際これから大人になっていくにあたって、競争しなければ生きてはいけないですね。ですから、そういう面でも親の立場としては、教育面というのはすごく大切だと思います。

委員長　現場におられる先生方もおられるようなので、もう少し実務的な立場から、考えと申しましょうか、あるいはご経験なりを少し。小学校はいかがなものでしょうか、このような問題は。小規模校、あるいはそうでない。

委員　私が今まで小樽市内で経験したところで言うと、稲穂も経験しました。小規模であると張碓も経験しています。今は、1学級の手宮西にいます。そんなところから考えてみますと、本当に今この資料にもあるとおり、メリット・デメリットは、やはりさまざまあります。そのとおりだと思います。よく調べてるなという感じもします。そこのところをとらえて、良いところを伸ばして、さらに、ちょっとまずいなというところは改善しながらやってきたように思っており、そのつもりで進んできました。また、今もそれぞれの学校で、それぞれ努力されてると思ってます。

例えば、小規模であれば、本当にきめ細かな教育というのが可能になってくるし、それが本当に実現されているし。その中でまた、地域と密着した特色ある教育が展開されるというようなことで、その部分では非常に良いと思います。

ただ、如何せん、やはりそういう閉鎖された人数なものですから、どうしても、マンネリ化というか、あるいは人間関係が出来上がってしまうということ、また、刺激が足りないということで。そこに、どう風穴を開けて、活性化させていくかということは、職員のほうのひとつのジレンマでもあり、やっていかなければならないことでもあるんですけど。その辺りを、今、一生懸命やっているところなんですけど。

私は、今、現実に6学級のところですので、基準からいうと、6学級じゃなく12学級へということですから。1学年1学級しかないものですから、そんなところでいうと、先程、委員から話しのあったところもあるんですけど、その中で学校経営をやっていく、学年経営をやっていくのは、やはり担任1人だけというと非常に難しさがある。また、やりやすさがあるということも現実ですけど。

ある学年でのいろんな打合せ等々を含めてやっていかなければならない。それでなければなかなか出来ないということなんですけど。現実には各教科それぞれ担当していますから、その中では、それぞれがやっていく。本当に一人が全てをやるということは非常に大変なことです。もちろんその積み重ねもある訳ですけども、なかなか大変なところで。

そこの中で、いろいろと学年で共同しながら、というところの職員集団の研修の進め方、あるいは経営の在り方等々を含めて考えてみると、やはり、私は現実に2学級の方がその良さはあるかなと思いながら、人間的な固定をすることなく、入れ替えながらということでは、今取り組んでいるところです。

そんな中で、小学校でずっと同じ学年同じクラスの子供達の、同じ人間関係、保護者もまた同じ人間関係、幼稚園から来て、小学校で同じで、また中学校へ同じ人間が行くというようなこともあるものですから。小中の連携ということでは、今は非常によくやりつつあるんです。とにかく、いろんなところで論議しながら、状況を説明しながら、これについてはこうだよということで、引継ぎを含めて進めながらやってるところですので、これからいろんな効果が出てくるところだと思っているんですけど。何とかそういう状況を打開していくということは、ひとつの適正配置の在り

方の狙いとしてあって良いかなと思っているところです。また、色々と論議が出てきましたらお話しさせていただきます。

委員長　ありがとうございました。中学校あたりはいかがなものでしょうか。

委員　中学校の立場から言いますと、やはり、ある程度の学級数がなければ、しっかりした学力を育てていくというのは、難しい面があるのは確かです。と言いますのは、分かりやすいところから言いますと、教員配置の問題があります。例えば、1学年1学級になりますと、それで全校の学級数が決まると、それに見合った定員配置がありますから、当然、免許外というのが発生します。

それから、これは私も経験しましたけども、今、委員がおっしゃったように、単学級でそのまま、小学校からずっと中学校も同じ人間で上がってくるんです。固定化というものが、どうしても避けられない面があります。お互いがお互いを知り合っているという良さはあるんですけども、それが固定化されてしまうというのは大変難しいことなんです。

ただ、今の2人の委員のお話しで、私も非常に大事なポイントだなと思うところなんです。小樽市として学校教育をどうしていくんだ、どんな教育を進めていくんだと、それを忘れてはいけないだろうなと。適正配置を、どこでラインを引くかというのは、非常に難しい問題です。その定義に合わせた形で、こうやるために、こんな学校配置をするんだと、その視点を忘れてはいけないなと思います。

そんなことで、今年度4月に、小樽市教育委員会から、いわゆる「あおばとプラン」というものが策定されまして、今、各学校で進めているところです。その辺ともリンクさせながら、進めていく必要があるなと思います。

今、小中の連携ということも非常に大事なところで、おっしゃるとおり、4月の保護者会、あるいは7月の保護者会で、まず保護者の皆様にご説明申し上げるのは評価評定のところなんです。あるいは、一斉テストで小と中ではこう違うんですよと、ただ素点だけで比べてはだめなんだよと。その辺のところを、おっしゃるとおり、小中の連携を図る中で、ギャップといいますか、そんなところを埋めていければ良いのかなと思いますし。どうしても中学校の場合は、進路というのも現実問題としてあるものですから、そんなことも考慮しながら。

ということで、話しがまとまりませんけども、中学校の場合は、学力の問題、それからもうひとつ言うと部活動、あるいは総合（的学習）にしても選択（教科）にしても、ある程度の人数がなければやはり成立しない部分なので、なかなか難しいなと思います。

委員長　どうもありがとうございました。

高校はちょっと違った状況かとは思いますけども、何かございましたら。

委員　高校生は、発達段階が違いますので、一概には言えないかと思います。

今2人の委員が言われたのと同じような意見になろうかと思いますけど、私はここで校長として3校目になります。この前は大きな学校、その前は郡部の本当に小さな小規模校でありました。

高校生の段階で、感覚的なところでお話しをしますと、やはり高校生であるならば、2学級以上がないと、なかなか教育成果が上げれないと、いろんな条件のもとでそのようなことが大きく言えるのではないかと考えております。ひとつには、先程委員も言われましたように、教員の配置の問題で、生徒の選択幅が小さくなっていくというようなことに伴っての学力の問題があろうかと思います。

そのようなことで、教育条件そのものをそろえるためには、高校でありますと、ある程度の、2学級以上くらいの規模を整えていかないと、成果を上げるのは難しいかなというように考えているところであります。

委員長　ありがとうございました。

委員　今、お話しを聞きまして、先程の委員の指摘されたことが本当に重要だなと思い

ます。子供達のどんな教育目標を、この市で、小樽でやっていくかということにリンクしていくと思うんです。

昔の話しになりますけど、15の春は泣かせないということで京都でやったのが、18の春が泣いてしまったので変わりました。おそらく小樽市は非常に、～またあとで別の委員さんから説明があると思いますけど～、やはり一つひとつの小規模校はすばらしい教育・特色があると思います。人間関係も密になると思います。非常にすばらしいことだと思います。

でも、ある競争というものから考えると、ちょっと問題があるし、私が留萌にいた時に非常に問題のひとつ、先程も話しがあったように、1学級校はだいたい一般教諭は5人ですか？、（他の関係委員に確認し）6人ですか。6人だったら、英数国理社、保健体育といったら全部ない訳です。

12年度から道教委で高校入試にヒアリングを導入したと思います。ところが、小樽は分かりませんけど、留萌の北教組は、留萌高校でやるときにも何故反対したか、ヒアリングの導入に強く反対しました。それは、僻地においては、（中学校では）専科の英語の教員がいない。今は上がってるとは思いますけど、あの当時は70何％しか英語の教員がいない。あとの20数％の者は、同じことをやったらすごく不利益を被る。だからダメだと。これは根拠になっている訳です。ところが今は、センター試験でも入っています。確かに部分部分で見たら言ってることは正しいのですけど、全国規模で見た場合には、どんどん北海道中が遅れていってしまう、というようなことがあります。

そうした時に、この根本は、じゃあ15の春を泣かせないのか、12の春を泣かせないのか。小学校から中学校へ行った時に、ああどうしてとなる。そんなところを考えなければならないと思います。

それで最初に戻りまして、小樽の教育環境をどう求めていくのかというところが、ある程度皆さん率直に、私はこういう子供達にしたいんだ、競争力をつけたいんだ、いや、それとも小さくても良いから、腕を組んで小さな社会で助け合っていくんだ。極端ですけど、ある意味ではどっちかの立場に立ってやっていかなければいけないかなと思います。ちなみに私は、後者の方の意見です。

委員　私は、教員の最初の振り出しが、後志管内の一番南側にある島牧村というところでした。

そこは、当時ですけど、小学校と中学校が一緒の建物の中で進めていく、一貫校ではなくて併置校と言っていました。ですから、職員室は、小学校の先生も中学校の先生もまったく同じで、子供達もそこの部屋を出入りしているというような学校でした。どの学年も1クラス、私は新卒の時、小学校4年生の担任を持ちましたけど、その学年の子供達が17名で比較的多い方の学級でした。

だけども、やはり小学校と中学校の、6年間3年間、つまり9年間クラスが分かれません。9年間ずっと同じメンバーで過ごすのだけども、地域柄からいって、その人間関係というのは、小学校上がる前からの保育所からもつながってきてるし、そして地域からいって高校は、だいたい寿都高校に進学する子が多かったので、小中学校6・3のみならず、高校3年間、それから就学前の年数も含めて、ほぼ人間関係が固定されているというのも、弊害としてあったのは事実です。

そのあと私は、小樽に来まして、小樽駅の裏の西陵中学校というところに赴任いたしました。その当時は、まだ小樽の学校も子供達の人数が多かったので、4学級規模ありました。当時は、4学級あると、だいたい先程話しがあったような、自分の免許以外の教科を、先生方は担当しなくても良いような学校でした。しかし、私が出る頃になったら、3学級という学年が出てきて、やはり教科の時数の関係から、例えば、来年の数学はこのスタッフなら誰か別の人が持たなければならないという話しをしてたのも事実でした。

そのあと私は、小学校に行きまして、手宮小学校に赴任いたしました。当時、手宮小学校は2クラスありました。私、3月までは若竹小にいたんですが、若竹小は1学年1クラスです。手宮小学校は2クラスありました。その手宮小学校も、だんだん1学年1クラスになってきたんですけども、やはり教職員サイドからいうと、先程のメリット・デメリットじゃないですけど、運動会を進めていくにしても、学習発表会を進めていくにしても、やはり、一人の知恵よりは、隣のクラスの先生と知恵を出し合っていろいろアイディアが出てくる、1人の限界を何とか2人でそれより良いものを作っていくということは可能でした。

それと、小中の連携ということなんですけども、ここは私のまったく個人的な持論になります。自分の経験上から、私は、小学校も中学校も経験いたしました。それで、先生方やはりいろんな講師とかを経験した方が、私は個人的には良いと思ってます。ただそれは、合う合わないがきっとあると思うんです。小学校に向いてる先生もいれば、中学校向きの先生もいれば、高校向きの先生もいる。ただ、一概にこうしなさいと私が押しつけることはできないけども、教職員の経験上、いろんな学校・講師を経験してることは良いことになるし、中学校で生かした経験を小学校で生かしていく、小学校で生かした経験を中学校で生かしていくということが、～交流ということはなかなか難しいと思うので～、個人的にはそういうことを少しでも促進すれば、もう少し学校は変わっていくかなというイメージは持ってます。

それと私は、もう一つ保護者の立場でもありますけど、今現在小学校6年生の子供と高校の子供がおります。それで、どんな学校を求めるかということなんですけども、アットホームな家庭的な学校を求めていくのか、子供も教職員も含めてたくさんの人たちと出会えるような場所を求めていくのか、これはいろいろな保護者の方々、いろいろな家庭の考え方があるので、この委員会として、これもいろんな意見をお持ちだと思います。だから委員会として、こういう学校があるべきというのは、まとめきらないと思うのですけども。それは、多種多様な考え方があるので、一概に、機械的に学校規模だとかというのは決められないだろうなと思ってます。

委員長　はい、わかりました。

「小規模校」という場合の「小規模」の定義はあるんですか？どの程度をもって小規模というのですか？

事務局　小規模、あるいは言い方として標準規模とか、あるいは大規模とか、そういう言葉遣いがございます。これが小規模だというのは、正直言って定義というのはないんです。ただ、国の法令で、この前の資料の中でも少しふれさせていただきましたけども、学校教育法施行規則というのがございまして、1つの学校で「12学級から18学級を標準とする」という文言がございます。そういうことから考えると、それを下回るのが小規模、それを上回るのが大規模というのが、一般的な通例の使い方と事務局では認識をしてございます。

ですから、12～18（学級は）、これは小学校ですと6学年ですので、それを6で割ると、1学年2ないし3が標準的な学級数、それを下回るものが小規模、それを上回るものが大規模、というのが一般的な言葉遣いではないかと思います。

委員長　そうですか。

いろいろ自由にご意見を出していただきましたけども、大変参考になるところもございましたし、これからこういうような点について特に重点的に考えなきゃいけないというような、これについてのいろんな示唆もいただきました。

これは、答申を作成する際には、あらためて文書化する必要がありますので、その時に、今までの意見を踏まえながら、文書化については、また再度ご検討いただくということになると思います。

委員　事務局への確認なんですけど、例えば、いま学級編制表を見ておりまして、最上小の1年生39人1学級となっております。おそらくこれは5月1日現在だと思い

まして、これが、4月1日には41人いたけど、急に転勤でいなくなったんで、学校としては大変だなということもあったと想像できるんですが、一応40というのはホームルームだと思うんですけど、少ない高校あたりでは、39を20と19に分けて2つにやります。当然これは全部の教科じゃありません。全部の教科をやったら教員が倒れてしまいます。基本的な、例えばホームルームとか、あと国語・算数とか、特定の教科になった時に、いわゆる習熟度別等のことによって、人数が少ない学級においても、2クラス編制という、～これは25人学級にしてと言ってる訳じゃないですが～、それを運用の面で、いる先生方の持ち時間は増えますけど、このような編制を、小学校でやることが可能かどうか、どうなんでしょうかその辺りを。それから、もし委員からもそういうことをやってる学校があったら教えいただきたいと思います。

事務局　事務局で先にお答えさせていただきたいと思います。

今、最上小学校39名ということで、これは5月1日の数字でございますので、当然、いま委員がおっしゃったように、例えば3月中には41人いて、その後、転出で39になったということも当然ございます。1学級は、40人規模で編制してますので、39人ですと1学級ということでございます。それで、小学校の方でも、学校の希望に応じまして、いわゆるティームティーチングという形で、ある教科、例えば小学校の場合、算数だとか国語だとかいろいろございますけど、そういった教科で例えば1年生を重点的に教えたりだとか、そういう教科別にティームティーチングという制度がございます。それは、学校の方で申請をいたしまして、道教委の方から認定を受けるといいますかOKが出れば、その学校にそういった先生が担任のほかにもう一人派遣されて、その学科について教えていくという制度がございますので、そのようにやってる学校も今小樽市内ではございます。

委員長　よろしいでしょうか。自由なご意見をどうぞ。何かございますか。

委員　私も、この会議の前段で、教育委員会さんから送っていただいたこの資料を読ませていただいたのですけど、今、委員長さんがおっしゃったように、小規模校の定義ということをちょっと懸念して、というか、どういうことなのかなと思ったんですけど、担当者の方から、いわゆる12から18以下が小規模ということでお聞きしました。

ただ、じゃあ今の言った定義以上でなければ、このメリット・デメリットが出てくるものなのか、裏付けとして、ここに書かれてるメリット・デメリットが、12～18ということをクリアしてなければ、こういうことが出てくるんだということ。

それと単純に、内容を抜きにしまして、メリット・デメリットを見ました時に、単純に書いてある文言を見ますと、文字の量からいきまして、メリットが少なくてデメリットが多いという作りになってまして、これもいかがなものかなと。

あと、最初の疑問点に結びつくのですけど、実際にひとつずつを評価していった時に、改善をちょっと、例えば、単純な話し、小規模校だと教職員の人材配置を少し補充すると、逆に良い教育が実現されるんじゃないかというのも当然、この中から読めてきますし、さらにまた、細かくは言いませんけど、メリットならば右側に出してもどうなのかなと、そういう見方もあるかもしれないけど、必ずしもデメリットだけでとらえられる問題かなということも、単純に、シンプルに考えました。

先程、話しがあったように、当然だと思うんですけど、この会議自体がどこら辺を目指して進んでいくのかと、実際に、やはり現実的な今の状況、それからいろいろな条例とか法律とかもございまして、それから予算的な配慮もあるので、なかなか一概に言えないこともありますけど、少なくても教育システムとして効果があがるための、学校規模なり学級規模ということが結局問われているのだと思うので、やはりそこら辺をまず、このような共通認識の中で、そこから現実的な対応として、あるいは実質的な対応として、どのようなことが提示されるかということを考えていかな

きゃならないのかなと。さらに言うと、現実の小学校を特に見ますと、全部が小規模学校みたいなもので、仮に、2つや3つを統合いたしましても、近い将来、結局的にはみんな小規模になってしまうと、このジレンマは小樽市の中にいると現実的には全く変わらないと。ですからもう一度、小規模校という法令的なことではなくて、いわゆる教育効果を上げるためには、最低限これくらいの学校規模・学級規模というあたりを、もう一度明確にされることがまずは先決なのかなと考えました。

委員長　ありがとうございました。あと何かございますか。

委員　私も、今回で2回委員会に出席させていただいてます。特に前回の資料で、ここでも話しておりましたけど、8ページのところの、「適正配置は新1年生における学級規模を、小学校においては2学級、中学校においては3学級とする」というような、具体的に数値をあげて検討しようという、そういうようなこととか、だんだん見えてきた訳ですけど。小規模校における、メリット・デメリットを道内と道外の学校名を挙げて掲載していただきました。

私は、たまたま花園地区の連合町会、3千世帯・6町会の町会長をしているという関係で、校下の花園小学校と菁園中学校に、毎年、入学式・卒業式・運動会・学芸会、中学では文化祭と言うんでしょうけど、それから、教育の研究集会の発表会とか、そういうものにご案内をいただいて、できるだけそういう行事に参加して、小学校・中学校の教育現場の実態というか、そんなものも見せていただいてます。

私は、高校教師を30数年やりましたので、いわゆる教育のプロというか、そういう立場で小学校・中学校を見せていただいてるのですけど、身びいきもあるかもしれないけども、非常に指導が行き届いている、礼儀作法を含めてですね。

中学校に行く時には、ひょっとしたら今年あたり茶髪の子がいるのかなと思っても、私の見る範囲ではいません。茶髪の子が悪いという先入観を持つこと自体が問題なんですけども例えで。それから、色んな授業の、先生方の指導の仕方が、私の目から見ても非常に熱心で行き届いているなという感じがして。地域のお世話をしている者として、非常に安心して小中学校に通っていただけると思ってます。

適正配置が何学級が良いかとか、そういうことは、この委員会の目標とか目的になってる訳ですから、それはそれで詰めていくべきだと、私も委員として何かお手伝いさせていただけるということで来てる訳です。

どなたかが先に申し述べられておりましたけど、私は、こういう適正配置計画案とか、小規模校である大規模校であるという判定、そういうことも客観的に必要なことだと思うんですけど、これと併せて、やはり教育問題を考えるうえでの一番大事なのは、教育方針とか教育にあたっての指導法、これなんかも併せて検討していかなければ、レールは引いたけれども、そこを引っ張る電車の運転手というか、～運転手をそういうものに例えて悪いですけど～、その引っ張り方、動かし方が悪いとレールがいかに適切であっても、地域全体としての、親御さんが期待してるような結果は得られないんではないかなと。ですから、教師自身も常に生徒から学ぶんだ、というような気持ちを持たなければ、教師が高い視点から教えてやってるんだと、従うんだということではなくて、もう時代は子供達と一緒に学ぶんだという、この姿勢をもってやっていただきたいと思うんですけども。

ただ、願望で終わるんじゃなくて、具体的に、～他都市のことを参考にしても結構ですけど～、小樽市としては、小学校中学校の教育のあるべき姿というのを本当に検討する機会、これも増やしていただきたいなと。小樽市民が納得のいく教育現場、そういうものをうみだしてほしいなというふうにも願っております。

委員長　ありがとうございました。

委員　私も市P連に関わっておりまして、一般の保護者の皆さんよりも、多少、小樽の教育というところで、事前の知識というか、そんなたいした知識はありませんが、教

えていただいている部分があるということで、先程から、小樽の教育がどうなっていくかというお話しがありましたが、最終的に小樽のまちづくりというか、小樽の活性化にもつながっていくというのが、私自身もすごく感じているところです。やはり、小樽の教育が魅力あるものであれば、人口も増えていくでしょうし、小樽の街も活性化して、経済も盛んになっていくというように考えておりました。

先程から言われてます、小樽の教育の理念のことですとかは、私も本当のところきちんとして押さえている訳ではないんですが、昨年、小樽のあおばとプランというのが、～あそこにも（ポスターが）貼ってありますが～、小樽の学校教育の推進計画ということで示されておりました。これは、第1回の時に、皆さんに、このプランの冊子も配られていたように思ったんですが、こちらのほうにも、小樽の教育はどういったことにしていきたいかという、これが小樽全体に広がっていけば、とてもすばらしい教育になるというプランがございました。

ただ、私達保護者の立場からすると、こういったプランも本当に一部の人にしか分からず、小樽の保護者みんなが、なかなか情報を得ることができないのが難しいところで、私達保護者の方も、それを知る努力をしていなかったところもあるとは思うんですが、何もないところからそれを調べようというのはとても難しいことで、学校ですとか、教育委員会さんの方から、皆さんに分かっていただけるように周知するよう努力していただけるのが、一番ありがたいかなと思って聞いておりました。

それと、先程からの、規模についての本当に個人的な意見ですが、子供達の、小学校と中学校では、やはりちょっと状況が変わってくると考えておりました。

中学校においては、中学校に今子供を通わせている親としましても、やはり少ない学級数ですと先生方の配置が少なくなるということで、教科の担任が併任されることがとても多くなり、部活の面でもやりたいスポーツができなくなるという状況で、小樽市内そういう問題を抱えてる学校がほとんどだと思いますので、中学校においては、適正に先生が配置される規模が必要だと思います。

ただ、40人1クラスが適正かどうかということは、それは別の問題になってくると思います。35人が良いのか、欧米の20人が適正ではないかという、そういうご意見はいろいろあると思うので、そこのところはその人数が適正というのはちょっと分からないんですが、少なくとも、子供達みんなが、きちんと教育を受けられるということを前提にしたうえでは、規模が小さいということのデメリット面はやはり考えてしまう。

反対に今度は小学校の方ですと、今まで規模の小さい小学校は、小さいなりのすばらしい教育があって、親ですとか地域の皆さんと連携した教育ですとか、みんな活動はされてきたとずっとそう思っておりました。今日の朝、新聞に北手宮小学校1年生の3人の姿の写ってる記事を見て、複式が教育的にも良い面がいっぱいあるとは思うんですが、3人で1クラスはやはり少ないのではないかと考えました。

小規模校のメリット・デメリット、この資料も、先程お話しもありましたように、ぱっと見た時にデメリットばかりだと思いました。要は、メリットの裏返しが全部デメリットになって、多く説明されていました。でも、これは、どこも少子化で、適正配置を考えていくうえで、何が適正かということを考えられた所で作られた資料なので、最終的には適正配置をしていった所での資料ですから、やはりこういうことになってしまうんだろうと思います。小学校においては、先程の話しで、複式はとても良いとおっしゃってる部分もあるというご意見でしたが、複式での教育が、果たして本当に、それから中学・高校に行くうえで、その子供達のための教育に良いのかどうかというのは、今朝の新聞を見てちょっと疑問を感じました。個人的な意見ですが。

委員　私は、現場の意見を伝える立場の人間になるので。

複式の学校に今勤務している先生方からは、複式の利点はあるんだという考え方が何校か出てきました。ただ、それ以外に勤務している学校の先生方からは、

複式が良いという声は、現実のところ聞こえてきてないというのが事実です。

それで、学級規模、2学級や3学級は良いんですけど、私、島牧の17人の学校から小樽の西陵中学校に来たら、一気に45人の子供達がいました。一般の教室は20坪ですから40畳しかない。45人の子供達がいれば、一人あたり畳1枚。
だけど、教壇があったり、棚があったりで、机が並べられていてビチビチの状態。それが、定数が40人に変わって、1クラスあたり5人落ちたのだけど、後ろの方だけでも非常にゆとりがあるなと感じました。

ただ、やはり今やってみて、これは私にとっての経験ですけども、手宮の時代もそうだったし、若竹の時代もそうだったんですけど、20人台が非常にやりやすいなという実感を持ってます。先程の、加配をもらってなくても何か複数で指導をやってるのかという質問ですけど、若竹小学校は現在5年生が19名、6年生が21名で、例えば、体育の授業をやるにしても、サッカーだとかゲーム的な要素でやるとするなら、20名そこそこだと、ゲームやってる子供、審判やってる子供、そしてお休みしてる子供と、結構回転が速くなって、子供達にとってもハードだという部分がありました。今現在、若竹は、5年生と6年生が一緒になって担任も2人入って体育の授業をやるというやり方をとってます。また例えば、2年生の子供達が26名、去年の1年生ですけど、1年生の担任が運動会を控えて50m走の練習をやるとなったら、スタートラインに並ばせる、ゴール地点でも子供達は駆け込んでくる、それをどう把握するかということで、やはり1人では無理でした。私はその時担任を持っていなかったので、私も一緒に体育の授業をやったり、授業じゃないけど学習発表会の舞台の練習もあります。たとえば担任の先生が上手側についたら、下手側の子供達を指導をする側がなくなるということで、そういうことの複数指導はやっていました。

それで、学級の定数の問題ですけど、先程も、30人以下学級が望ましいのか、欧米並みに20人程度が望ましいのかという話しですけど、これは、ここで結論が出る話しでなくて、やはり、だいたい皆さんの考えは40人カツカツだときついなという思いは一致してると思うので、やはりこの定数の改善のことについては、道教委なり、最終的には定数ですから文科（文部科学省）の方まで、小樽市教育委員会としてしっかり伝えていってもらいたいなということはお願いしたいです。

それとあともう一つ、私、教職員の代表ではなくて、親という立場でお話しますけど、先程言いましたように、一人の子供は高校2年生です、一人の子供は小学校6年生で来年中学校に上がります。それで、何が親として思うかというと、どこの学校に入るということじゃなくて、最終的にきちんと社会人として自立していけるのかと。つまり職業人としてなっていけるのか、これはここの検討課題じゃないんだけども、今若い子供達が、それこそ景気がいい景気がいいと、バブルを超えていざなぎに迫るという日本の景気の良さなんだろうけども、まったく北海道それから小樽は景況感が伝わってこない。やはりフリーターがまだまだ多い。大人も、正規雇用じゃなくて非正規雇用がたくさんいる。やはり最終的に社会人としてどう自立していけるのか、社会の形成者としてどうこれから子供達が育っていけるのかというようなことが、親としての一番の思いでないかなと私は思ってます。

委員　先程の複式学級の件で、話しは戻ってしまうんですけど。

私自身、複式学級を経験したんです。主人も同じように複式学級を経験したんですけども、振り返ってみて、複式学級は良くなかったと思います。確かに、複式学級をして、体育とかは成り立つのでしょうけど、ほかの授業の面では、やはり複式学級ではない学校とのデメリットが大きいような気がします。あと、うちの子供達は、いろんな学校を転校してきた中で、やはり小規模校よりは大きな学校の方が、良かったという我が家の個人的な意見です。そのように感じてます。

委員長　ありがとうございました。

委員　せっかく参加しましたので一言だけ。私は、もちろん教員でもありませんし、親でもありません。そういう立場で、まちづくりという立場で参加をさせていただいております。

まず、この小規模校のメリット・デメリットの資料ですが、帯広・旭川・東京と、名だたる所が出ておりますが、やはり小樽とはちょっと現状が違うんじゃないかと。
旭川はいま人口は伸びてないと思いますが、帯広はどんどん人口が伸びている都市でございますので、またほかの都市を見ましても、北広島にしましても、上昇傾向にある都市が出ております。これは、若干、小樽として比較になるのかな、これはちょっと疑問だなという感じがいたします。やはり同規模で、耳の痛いところかもしれませんけど、資金的な面とかいろんな面を、同じような規模で、きちんと対象に比較できるようなサンプルを出していただければと思います。また、ここまでメリット・デメリットまで出していただけたんであれば、小樽市と同じくらいの資料とは言いませんけど、実際にどういう学校があってどういう規模でという数字だけでも、もし出していただけるのであれば、比較検討しやすいのではないかなと思います。

それと、今まで、教員の立場、保護者の立場と、いろいろお話しを聞いてまいりました。今回の我々が今集まっている会でございますが、スケジュールを見ますと、あとおそらく10回くらいですか？、という中で、確かに根本である教育理念というのは大事だと私は思います。ただし、残り10回の中で果たしてそれがまとめきれるものなのかどうかという疑問がございまして、もちろん大事なところですので、そこの部分に時間をかけるのは大賛成でございますが、やはり的を絞って、テーマを絞って、最終的に結論を出すという部分があると思いますので、その辺のこれからの配分というものをお考えいただければと思います。

また、先程、教育を考えたら札幌だなというご意見もございましたが、実は私は商売的なことで良く分かるんですけど、小樽は建てづらいという状況がありまして、土地も高い、税金も高い、いろんなことがございまして、だからみんな隣接する星置ですとか、あっちの方へ行ってしまうという事実がございます。これは確かです。

それと、ひとつ私の経験でお話しをしますと、我々の業界の中で教育難民と呼ばれている方がいらっしゃいまして、要するに先程の指定校の話しとダブるかもしれませんけども、どこどこの小学校に入りたいから、このエリアで例えばアパートを探してくださいとか、家を探してくださいとか、土地を探してくださいという話しが相当あります。これも正直に言いますけど3年に1回変わります。元々は、このブームが起きたのが、望洋台から始まりまして、望洋台から行って、桜へ行って、高島へ行って、今は稲穂小学校がナンバーワンですね。稲穂小学校の学校区だったらどこでも良いという方が相当いらっしゃいます。私には良く分からないんですが、おそらく先生なんだと思うんですね。先生が異動されてるのかそれは良く分かりませんけども、たぶんその学校が良いという判断をされて、おそらく横のつながりの中で情報を得て、このエリアが良いという、その学校が良いという判断をされてるというように感じてます。これは本当におもしろい、逆に原因は何なのか聞きたいなと思うところなんですけど、大体3年に1回そういった形で、人気校と言って良いかどうか分かりませんけども、変わっております。ですから昔は、高島も結構、あのエリアは一時期すごく人口が増えたんですね、一時期ですけど。それが、5年後になるとまた元に戻りました。それは、おそらく何かの原因があってそういう形になったのだと思いますけど。参考までにお知らせしておきます。

委員長　その他ご発言ございませんですか。よろしいですか。

それぞれ、皆さんから、メリット・デメリットをきっかけにいたしまして、教育に対する熱い思いを語っていただいというところなんですけども。

この検討委員会の進め方、あるいはまとめ方に関連することですが、確かに教育理念あるいは教育方針、小樽についてはどうするんだということについては、大

変重要な問題でして、それを頭に置きながらまとめて進めていかなければならないというのは、そのとおりかと思いますけど、理念とか方針、あるいは指導方針ということになりますと、大変これは人によって違うものでございます。大変、主観的な側面も強いものでして。この委員会でどの程度突っ込んだ検討ができるのか、ちょっと分かりませんけれども、大ざっぱに言いますと、他都市から見ても、ぜひ小樽市は魅力的な教育環境にあるということを目指して、やはり皆さん考えていかなければいけないのではないかと。

ある程度、抽象的ではありますけども、「あおばとプラン」であるとか、あるいは資料を見ますと、前回いただきました資料では、「21世紀プラン」にもありますし、それから「あおばとプラン」、そのあとの「おたる子育てプラン」というような、ある程度、小樽市の教育理念を盛り込んだ、あるいは方針を盛り込んだ、こういったような報告書と計画もある訳でございますので、我々としては、それを踏まえながらやらざるを得ない面があるのではないかと。基本に立ち戻ってそれを見直そうということは、ちょっとできない訳でございます。しかし、魅力ある教育環境を、あるいは教育を実現しようという点では、共通な思いではないかと思っておりますので。

あと、じゃあ適正規模はどうかということになりますと、これからいろいろ議論を進めていく中で、小規模校あるいはそうでない大規模校といいますか、あるいは標準校といいますか、いろいろメリット・デメリットはある訳です。それをいろいろ検討しながら、ある点での一致点といいますか、ある程度の目標を定める必要はあろうかと。

今すぐ、どうだという結論は出ませんけども、これから何回かに分けて、そこら辺りも、いずれはどこかの点に収縮していかなくてはならない。その際に大事なことは、理念だけを追求いたしましても、現実的でないということになりますと、これは困る訳でございます。今の財政状況、あるいは人口の推移の状況、こういうものを踏まえながら、どの辺りが最も小樽市としては適切なのか、ということも考えていかなくてはならないと。大変難しい問題ではございますけれども、そのような方向で皆さんにお考え願えればというのが私の希望でございます。

いずれ、どの程度、報告書に盛らなくてはいけないのか、答申案に盛らなくちゃいけないのか、いまだちょっとはっきりしないところもありますけど、必要に応じてまた皆さんにいろいろご議論いただくことになろうかと思いますけど、その時はまたよろしくお願いします。

この問題は、一応そのくらいにさせていただきまして、もう少ししか時間がございませんけど、（議題（3）は）「学校規模の在り方についての意見交換」となっておりますが、これも、当初、私がお話ししましたように、いきなり意見交換というよりは、この問題につきましては、小樽が一体どのような状況になっているのか、現状認識に詳しい方もおられますけど、そうでない委員もおられる訳でして、私は、委員長をやりながら、小樽の現状については、あまり十分な認識を持っていないというところでございます。この点についても、やはり正確な正しい現状把握と、それから皆さんの共通理解が必要ではないかと、こう思っておりまして、議題はこのような名称になっておりますけど、ぜひ、一体現在はどうなのか、過去～将来についてどのように推移していくのか、ここら辺りを少し勉強いたしたいと考えているところでございます。

前回配布されました資料でいいますと、資料の19以降・17ページ以下でございます。資料19は、これは18年度の学級編制がこうなっているという表でございまして、資料21になりますか、これからどうなりそうだという学級の推計でございます、大体このような変遷をたどると。それから資料21と22は同じような表ですが、ちょっと違ってるようですが。それから、資料23と24もそうです。大体、小中学校について、こんなような児童数、生徒数、あるいは学級数の変化が見込まれるとい

うような表でございます。
　それで、あまり時間もございませんけども、このような表に基づいて、一体どのようなご感想なりご意見、見通しをお持ちなのか。私が実はもっと知りたいのは過去でございます。これは18年度以降の推計なんですけども、過去が一体どうなってるのか、少なくとも過去10年に遡って、今までどんな動き方をしてきたのか。
この検討委員会が発足しましたのも、そういったような、今までこの変化になかなか現状が対応できないのではないか、こんなような認識があったからではないかと思っておりまして。そこら辺りも踏まえながら、こういったような小樽市内の学級あるいは児童数の変遷について、どんなふうに考えたらよろしいのかということを少し皆さんとまた、これもフリートーキングでありますけど、いろいろとご感想めいた部分で結構ですからお出しいただければと思いますが。私がむしろ表として知りたいのは、過去なんですが、事務的にどうなんでしょうか、過去10年くらいに遡って、今までこのように変わってきたというところは、これは資料は残ってるのでしょう。どうでしょう？

事務局　過去の表については、これと同じような学級編制表というのがございますので、それをお出しするというか、傾向については提出することはできますので、次回の時にお渡ししていきたいと思ってます。

委員長　その間に、例えば、小学校が統合されたり、新設というのはなかったと思うんですけど、そのような小学校の変化というか、小学校・中学校がどのように変化してきたのかというのは分かりますね。

事務局　資料12に、昭和24年から、全体の子供の推移と申しましょうか、児童数の推移を挙げてございますけども、これではなくて、各学校の変遷ということでしょうか？

委員長　そうです。

事務局　わかりました。

委員長　小中学校はどんなふうに整理されたり、新築はないですか？

事務局　新築もあります。

委員長　そうですか、それも含めて、どのように変わってきたかを知りたいということです。
　そこら辺りを踏まえて、みなさんがどのようなご感想なりご意見をお持ちかということを伺いたいということです。
　この大きな要因になりましたのは、やはり小樽市自体の人口変動でございます。
　21世紀プランが（資料の）後ろの方に載っておりますが、市民と歩む21世紀プラン、35ページでございます。このプランを策定したのは、随分前ですが平成10年でございます、8年前ですが、実はこれは私も関わったものでございますが、人口予測については大幅に狂ってしまいまして、予測したものとはまったく違った結果になりつつあるということでございます。
　このようなことであるとか、あるいは経済状況が変わってきた。人口動態も変わってきた。いろんな諸要素が大きく変化した訳でございます。
　我々としても、このプランを作ったときの予測の範囲を大きく超えていたような面がある訳でございます。小中学校の適正規模・配置ということになりますと、そういう問題とも無関係ではないと。
　これから18年度以降の表については、先程のようなことでありますけど、いったいこの表から何が得られるのか、あるいは何が見えるのか、この辺りを手がかりにして、皆さんのご意見ご感想をいただきたいと思います。

委員　事務局に確認なんですけども、今、委員長が言われたように、21世紀プランというのは、平成19年までの10年間のプランで、来年までのものだと思うのですけど、その先のプランというものはまだできてないのですが、あくまでも今回の規模配置、その後の委員会としての計画の策定というのは、現状の21世紀プランに合わせてやるという考え方なんですね。

委員長　21世紀プランというのは、たぶん（人口）17～18万を想定しているんじゃないかと。それ自体は現状に合いませんけどね。

事務局　私の方から、21世紀プランの見直しについて現状進めておりますのでご説明させていただきます。

現在、この基本計画につきましては、資料35ページにありますように、平成19年度までの10年間ということで策定いたしました。これにつきましては、ワンクッション置きますけども、平成20年度から、あらためて今の人口の推移、これも現状とは、現在のプランとはかけ離れてきてるということで、この人口を含めて、それから基本的な計画、これも今の財政状況ですとか社会状況を踏まえて、見直しをかけるということで、現在、事務的に見直し作業にかかっている段階でございます。

その中で、将来人口をどうのように推計していくかというのは、今後の議論になります。そういう形で、総合計画については、現在、見直しをしてるところでございます。

この適正配置の関係でございますけど、人口というのも、ひとつのまちづくりの観点では大変大きなものだとは思います。ただ、現実的に、小学校に入学する数といいますのは、毎年の出生数というのがひとつデータとしてございます。

実際、入学する際には、社会動態というのがありまして、増減がございますが、現在、平成24年度に入学することになる（平成17年度の）実数での出生数が出ておりますので、そこらあたりまでは、この数字をひとつのベースとして考えていこうということで、推計の数字には出生数をもとに推定しておりますので、総合計画の総体の人口とは、ちょっとかけ離れた考え方で進めていきたいと思ってます。当然、リンクはするものでしょうが。

委員　（事務局の）あげ足を取る訳じゃないですけど、教育を考えていくうえで、先程言ったように、社会的にも経済的にも今どんな状況にあるのか、地域を含めて、それらの背景をしっかり押さえて教育論議をしていかなければならないけども、あらたな適配は、先程財政状況と言いましたけど、財政論との切り離しなのか、財政論を含めて論議をしていくつもりなのか、それによって方向性はやはり、考え方とか道筋が大きく変わってくると思うんです。そこはどうなるんでしょうか。

事務局　私どもが申し上げましたのは、総合計画の実施計画・基本計画においては、やはり今の小樽市の財政状況を踏まえた計画になるだろうという考えでおります。

それで、今この適正配置を考える中では、財政論をまず表に出してという形ではまったく考えておりません。ただ、配置の問題ということになりますと、財政的な影響といいますか、その部分は議論としては出てくるのかと思いますけど、それをまず第一ということではございません。

委員長　全般的に、将来的には児童数というか学級数は徐々に減りつつあると、だいたいそう言ってよろしいですか？おおまかに言うと。

事務局　その傾向にあります。

委員長　だいたいその傾向にあると、そういうことなんでしょうね。

私の家の近くの小学校の状況を見ましても、ここ10年くらい、もうちょっと前からでしょうか、急激に変わったものだという気がしております。私は桂岡ですけども、随分変わったもんだなと、こんなに急激に変わるものかなとすら思ってます。

委員　ちょっと話題が止まったようなので話題の提供を。

先程、3年スパンでの人気傾向の話しが出てきました。過去の適配が、なぜ成功というか、結果的にできたかといった私なりの考え方ですけど。中学校の場合は3校をなくしました。特に大きなポイントになったなと思われるのは、「菁園中学校を、旧校舎を解体して新たな校舎にいたしますよ」と言ったところで、かなりの保護者、地域の方々、子供のイメージも、そちらの方向に向いていったのだろうなと思います。それから、先程、稲穂のことが出てたのですけど、先生方がどうなのかと

いうことは別にして、小樽市内で（小学校では）やはり一番新しい校舎です。

やはり、そういう施設設備を求めるという、子供にとっても、保護者にとっても、ニーズというものはあるんだろうなと思います。

今回、例えば、手宮の委員も見えてますけど、手宮地区は方向性としては北手宮と手宮という話しがあって、手宮西に統合という計画だったけども、あれもひょっとしたら、ホーマックの辺りに新しい学校を建てますよという話しだったら、また方向は意外と違ったのかなと私個人的には思ってました。実は私は手宮出身で、生まれ育ちが手宮だったんですけど、地域の人たちからちらっと聞こえた意見の中では、そんな声も聞こえてきたので。

ズバリ、今回、成否の鍵を握ると言ったら変ですけど、既存の施設は確かに老朽化しています。耐震上の問題もあります。これも、できるかできないかの話しですけど、新築の校舎というか、そういう方向性が打ち出せたならば、やはりかなりイメージが違ってくるのかなと思います。

それともう一つ、今日は規模ということで、ポイントが一応焦点化されてるので、話題には出てきてないけども、やはり今、一番保護者が危惧している点は何かというと、線引きが変わった時点で、子供達の登下校の安全の問題です。学年が小さくなればなるほど、重たいランドセルを背負って、朝送り出したけども給食を食べてちゃんと学校から家に帰ってくるかなと、これはやはり何といっても一番心配な部分だと思います。子供が何歳になっても心配なことは心配なんだけども。そこの部分は、これからの中ではしっかり話題になってくと思うんですけど、当然考えていかなければならない課題で、地理的な状況だけでなくて、交通量がどうなのか。

堺小学校は今年で閉校になって、稲穂と花園に振り分けられました。親の願いとしては、聞いたところによると、もうこれだけのコンパクトな学校、子供達をやるに忍びないと。新しい学校で心機一転頑張ってもらいたいという思いで堺もうまくいったのだろうと思うんだけど。結果的には、先程の人気の集中してる稲穂だとかという、私はそこら辺が鍵を握ってるのではないかという気がいたします。

委員　今、現実的に成功されてるというお話しもありましたけども、適正配置のこの委員会の前段で、量徳の問題だとか、手宮で失敗したといったら失礼ですけど、現実的にそれがうまくいかなかった評価というか、検討というかどんなふうに。実際の経緯を委員会にお知らせ願えれば、それもまた考える時の大きな参考になるのではないかなと思いますけど。

事務局　今、委員から、一昨年来の小学校の適正配置計画案、教育委員会で取り下げをしたという部分で、それぞれ関係する学校と教育委員会とのお話しの経緯的なものということでございました。

最終的に、堺小学校については、先程もお話しがありましたように、規模が小さくなっている、それからまた、複式という現実問題がきているということで、保護者・地域の方と教育委員会と何度もお話し合いをいたしまして、最終的に今年の春に閉校ということになりました。

適正配置計画案で学校としてあげた、ほかの3つの学校について、手宮地区には2つの小学校がございまして、北手宮小学校と手宮小学校。それから南小樽地区では量徳小学校。この3つの小学校では、やはり、それぞれ、保護者の方、あるいは地域の方は、小学校なものですから、より地域に密着しているという思いが強かったというように思っております。

そういった中で、なかなか教育委員会としてたてた計画案で、保護者の方に具体的にストンと見えなかったんではないかなと。具体的な部分で、先程も校舎の面とかというのもありました。それから教育内容という部分もありました。そういうことで、それを説明はしたんですけども、現実問題として、それぞれの地域的な事情といいますか、例えば手宮地区では、2つの小学校がなくなるというような思い、そ

れから南小樽地区については、隣接してる土地に市立病院のお話しがございましたので、そことのお話しとか、そういう、それぞれの地域的な思いがありまして、全体的な小学校の適正配置という観点からのお話し合いが進まなかったと。教育委員会としても、それを無理矢理長い時間をかけて延ばすということにもならないのではないかと。

それから、先程もちょっとふれましたけども、地域の理解が広がらないことと、実際に全市的な見直しをする時期にもきているのではないかと。ある程度地域を絞ったという考え方も一昨年の時にはございましたけども、それ以上に少子化が進んで、ほかの地区も早急に検討を進めなければならないというような判断に立ちまして、最終的に計画案を取り下げて、もう一度市民的な議論を起こしていきたいというようなことになった訳です。

委員長　あと何かございますか。ちょっとこのテーマについては何か話しがはずまないようですが。

委員　撤回になった適正配置のことで、ちょっと、あまりこういう場にはふさわしくないと言う方もいらっしゃるかもしれませんがすみません。

まず、手宮地区に関しては、冬の通学路が非常に危ないという問題があって、これは私は手宮地区ではないので、仕方がないかなという印象がありました。

量徳に関しましては、私は子供が潮見台小学校ですので、実は非常に楽しみにしていた一人です。潮見台も各学年完全に1クラスです。全部で6クラスしかありません。それで量徳の子たちが来て、やはり2クラスくらいずつになってくれればすごく良いなと思ってました。それで、量徳は非常に今回もめてしまったんですけども、どうも感情論というか、自分の子供が通う小学校がなくなるというと、大体の人はあまりいい気がしないというのはあると思います。

私は、小樽にずっと住んでる訳でもないし、例えば、うちの子供の通う小学校がなくなるから、奥沢なり量徳なりに行ってくださいと言われればはいはいと言う、割とそういう方なので特に問題はないんですけど、量徳の廃校に関しては、子供の教育環境がどうこうという以前に、感情論の問題になってしまったんですね。まず、今話しの出ました市立病院のことであるとか。

あと、小樽の人の傾向として、私は、小樽では結婚後ですからまだ10年ほどしか住んでないんですけど、非常に自分の人間関係を壊されるのを嫌がるという傾向があると思います、はっきり言いまして。小さい中で固まって、新しい人を受け付けないという傾向もあると思います。それは、別の委員さんも感じてらっしゃるというお話しで、こちらの方も室蘭ですとか札幌ですとかを回ってこられてるということで。非常に馴染みにくい街ですね。すごい特殊だと思います。そういうことがあって、新しい環境を受け入れにくいという気持ちがあるということを、まずひとつここの場でお知らせしたかったのと。

あと、これは、これからもし統廃合なるにあたって説得というか説明会にあった時に、ちょっとこれは言って良いか分かりませんが、量徳小学校のある親御さんから聞いたんですが、もし統廃合になったらうちの子供は新しい学校には行かない、そういうふうに言ってやるのが一番教育委員会には効くという、こういう発言が実際に出てます。それはどういうことなのかなと。子供に教育を受けさせる最終責任というのは、すべて親にありますから、学校がどうだとか、教育委員会がどうだとか、そういう問題ではまったくないですね。だから、はっきり言って、そういうことを言う人には、じゃあご勝手にどうぞと、私だったら言ってしまうという話しなんですけど。そういう意見が出るような経緯も何かあるのかは分かりませんけど、ちょっとそういうところで相手にしきれないというのでしょうか、きつい言い方になりますけども、そういう言い方をしてきた人には、どうやって返すのかということを考えていかないと、なかなか成功には結びつかないと思います。すいません、ちょっときつい意見にな

ってしまいまして。

委員長　この検討委員会では、ぜひ、特定の何々小学校というよりは、全市的な観点から、全体的な視点から、小樽の教育問題をどう考えたらよろしいのか、ということでご議論をお願いしたいと思ってます。

あとよろしいでしょうか。なにかございませんでしょうか。

委員　やはり今回は、全市的な視点にたって見直しというのは、当然の方向だろうなと思います。これも結果論ですけども、私は先程から言ってるように若竹にいました。若竹も非常に小さな学校だけども、当時は、いわゆる対象にはされませんでした。地域としては非常に喜ばしい出来事でした。その理由としては、今、マイカルの横に民間のマンションが2棟建ってますし、港側に新築の道営ができて、いま国道沿いにあるものは市営に替えていく。となってくると、当然のことながら人口が増えて子供達も増えるから、若竹は対象外だというようなイメージだったんだけども。それはやはりどう考えても、ほかの地域の人たちにしたら、そんなの見通しでしょと。それは例えば手宮地区の人達とか、量徳地区の人達にとったら、本当にそうかいという気持ちになったんだと思います。

今回は、全市的に、まず感情は抜きにして。機械的もちょっとまずいですけど。地域は当然出ないんで。感情論をすっかり抜きにして、論議を組み立てていくというのについては賛成です。

委員長　よろしいでしょうか。時間でもございますし、今日のところは、勉強会のつもりでフリートーキング、皆さんのご自由な意見を出していただいた訳でございます。

ひとつは、小規模校のメリット・デメリットの資料を出していただきましたので、これをきっかけに、いろいろこれからの論議の在り方等も含めましてご意見をいただいた訳でございます。

それから、ちょっと足りないなと思っておりました点で、私は特に希望したんですけども、小樽の現状について、やはり共通認識を持つ必要があるということで、いろいろご意見を伺った訳でございます。

次回ですけども、さらにまた少し勉強した方がよろしいんではないか、この点についてもう少し詳しく知りたい、というようなことがございましたら、ご自由にお出しいただければと思いますが。検討に入る前に、やはりこのようなきちんとした認識を持つ必要がある、理解をする必要がある、と思っておりますので、もしもございましたらお出し願いたいと思います。私の方も、事務当局といろいろ相談しながら、どんな点についてこれから少し詰めたらよろしいのか、あるいは学習したらよろしいのか、考えてみたい、整理したいと思います。

そして、それを踏まえまして、次回以降どのような検討をしたらよろしいのか、期限もございますので、やはりきちんとスケジュールを立ててやっていかなくてはならないと思っております。それは、私あるいは事務当局の方にお任せいただきたいと思います。何かご希望はございますか。

委員　この先、10年くらいを目途に考えたら良いのか、それとも、先程も話しがありましたが、まだまだ減るという可能性があってその後どうするというところまでは、なかなか考えにくいと思うんですけど、どうなんでしょうか、どの辺りくらいまでを考えたら良いのかという。

委員長　諮問する側としてはどうですか。何年くらい先まで考えて作るのか。具体的な年限といいますか、それは特に諮問されなかったように思いますけど。こういう計画となりますと大体10年スパンでしょうか。長期プランというのは10年が大体のスパンですけども。どんなもんですか？

事務局　いろんな資料の関係もございますが、やはりひとつの目途として10年というのはございますけども、いわゆる考え方といいますか、今後の小樽における学校の規模・配置の在り方、これについての考え方を示していただいて。具体的な計画とい

いますのは、これは教育委員会がスケジュールをたてて、皆さんからいただいた答申をもとに年次計画をたてていくという形になろうかと思いますので、その辺を見据えた土台となる考え方、この辺のところをお願いしたいと考えております。

委員長　それにしても、ずっとこれから先、永久にということではない訳で、状況の変化というのは、やはり頭に入れなきゃいけないと思いますので、この委員会としては、やはり未来永劫という訳にはいきませんから、やはり10年スパンくらいでものを考えるというのが普通じゃないでしょうかね、こういう計画を決めるという場合には。
大体そんなことを頭に置かなきゃいけないんじゃないでしょうか。こういう、いろんな変化の激しい時期ですから、やはり10年くらい先のことまで考えながら、そういうことでご検討願えればと思ってます。

それでは、本日はよろしいでしょうか。

あるいは何かまた、このような資料を整えてくれないかというようなご希望がございましたらお出し願います。よろしいですか？

それでは、次回のスケジュールですか、日程とかをお願いします。

事務局　次回の日程でございますけども、9月最終週、あるいは10月の第1週を考えておりますけども、日程につきましては、皆様のご都合を調整のうえ、早急にお知らせしたいと考えております。場所につきましては、この会場と考えておりますのでよろしくお願いいたします。

委員長　では、次回につきましては、あらためて皆さんに、調整したうえでご連絡いたします。よろしいでしょうか。

それでは、本日は大変暑いなか長時間ご苦労様でした。

（以　上）